

88年以降の研究生活においては、鹿児島県の歴史に関する研究が加わった。88年3月、県短地域研究所のプロジェクトとして行った研究調査の一端を「〈史料紹介〉薩摩郡下甕村手打地区の麓青年社・戸主会に関する資料」としてまとめることができた。89年の夏から秋にかけては県短40周年記念誌の通史的部分を執筆するため、教育行政を中心とした鹿児島の近現代史について勉強した。鹿児島については未だ勉強中の段階だが、「鹿児島の近代化の諸問題」をテーマに、今後いっそう研究してみたいと思っている。

## 1989年度の研究報告

中山 一 樹

わたしの研究テーマは、近代学校が今日の日本でどのような社会的機能を果たしているかということである。目下すすめている研究にそくしていえば、学校に行きたいと思いつながらも行けない子どもの数が年々増えつつあるという事実に着目し、それが単に個々の子どもの「不適応」問題なのか（学校は不問にふされるのか）、それとも外被としては個人の病理（心身相関的葛藤）として現象しながらも幾多の媒介を経て、現代社会に特有な矛盾（近代学校の矛盾のあらわれ）の発露なのかということ（学校や家庭の機能が再検討される）を考えている。

このような意図から昨年度は次の三点の論文を発表した。①不登校の子どもたちとの教育的関係から見えてくるものを養護学校寄宿舎の事例をもとに検討した（月刊誌『教育』No.514, 国土社）、②不登校問題を扱った文献（臨床心理・児童精神医学・教育学）のオーバービュー（前掲同号所収）、③こうした子どもの出自である家族・家庭と現代社会のありようについて、「私化」（プラヴァタイゼーション）という視点から検討を試みた（『思想と現代』No.20, 白石書店）。

これからの予定として、不登校の子どもをもつ親たちが作っているネットワーク（親の会）の実態をフォローしながら、学校化（制度化）された社会において、子どもや親が権利としての教育をどのように取り戻すことができるかその筋道を考えたいと思う。また、教師や教育実践はそれらの動きにたいしてどのような結び方ができるのかも検討課題となってくるはずである。

さし迫った仕事としては、教育科学研究会（教科研）全国大会（8月10日～12日）のシンポジウム「『登校拒否』に関する総合的研究」の司会を担当することになっている。ここでは、さきに述べたような父母の会や児童精神科医、学校保健担当者、教師がさまざまな立場からこの問題について意見を出し合う予定でいる。9月には鹿児島大学公開講座「子どもの不登校問題と現代の学校・家族・社会」において、主に不登校の子どもと学校

との関係について親たちと考えてゆきたいと考えている。

以上の研究テーマとは異なるが、以前にまとめた『日本教育史年表』（伊ヶ崎暁生・松島栄一編，三省堂）が刊行された。わたしは1965年から1974年までを担当した。

## 過去の研究概況と現在の研究状況

山本秀行

### (1) 過去の研究概況

学部生の頃には、19世紀アメリカ文学，特にアメリカン・ルネッサンスというアメリカ文学史において最も華やかな時代の文学に興味を持ち研究していた。その中でも特にエドガー・アラン・ポウは，卒業論文でも取り扱い，学部時代の中心的な研究対象であった。

大学院では，研究対象を前々から興味があったアメリカ演劇に変えた。その中でも，特に20世紀の劇作家テネシー・ウィリアムズに焦点を絞り研究を進めた。修士論文は『テネシー・ウィリアムズのアンドロギュヌス神話創造－普遍性探究の自己劇化』（*Tennessee Williams' Making the Myth of Androgyny: Self-dramatization in Search of the Universal*）であった。その要旨を以下に簡単に記す。ウィリアムズは作品の中で自分自身の精神状況をその時々に応じて表現した。それにもかかわらず，それは単なる個人的な記録という段階に留まらず，普遍的な価値を持った文学作品となって読者（あるいは観客）の心に強く訴えかけてくる。いわば，ウィリアムズは創作活動を通して，自己劇化を行い，現代の神話を創造したのである。

### (2) 現在の研究状況

現在，研究を進めている題材はウィリアムズの作品における精神分析学および精神療法の影響である。彼は精神分析学に興味を持ち，自分の精神的不安を癒すために，精神分析医の助言の下でいろいろな精神療法を受けていた。また，彼が知らないうちに最愛の姉ローズは前頭葉切除法（lobotomy）という，当時まだ実験段階にあった危険な手術を受けさせられ廃人同様になってしまった。このことは彼の精神的外傷（trauma）となって多くの作品の中に反映されている。彼の作品の中に潜むこのような精神的外傷を探ることは，彼の作品の本質に迫るための非常に有効な手段であると考えられる。

ウィリアムズの作品の中で精神分析学および精神療法の影響が最も顕著と考えられるものの一つに『叫び』（*Out Cry*）という劇がある。この作品と精神療法の一つであるサイコ・ドラマ（psychodrama）の間には多くの類似点を見い出すことができる。この両者が極めて類似しているということにどのような意味があるのだろうか。以前，このテーマについて口頭発表をしているが，今年はそれを加筆修正し論文として発表するつもりである。